

ぶらりわが街宮沢界限

⑳ 幕末～明治初期の豪商「中久大尽(ナカキユウタイジン)」の興亡

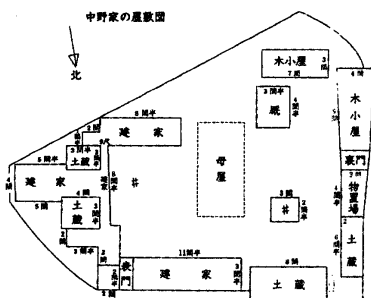
江戸時代には何度も飢饉(ききん)がありました。市域で決定的な影響を及ぼしたのが、天保(てんぽう)年間の4年(1833)の凶作(きょうさく)と7年の異常な降雨と冷害・8年の暴風雨の二つは、村にとって壊滅(かいめつ)的な被害をもたらしました。そのうえ、凶作をみた商人たちの穀物の買占め、売り惜しみが加わり、また、代官や領主のなかには、物価上昇により領民からの収奪(しゅうだつ)を強め、そのため、村の人々の窮乏(きゅうぼう)はよりひどいものになり、耕作地や屋敷を手放したり、潰(つぶ)れ百姓となったりしました。このような貧農の手放した土地を積極的に手に入れ、大地主となる村人もいました。商品作物が盛んに生産され、商品の流通が活発になるにつれ、その売買に携(たずさ)わり大きな利益を得る村人がいました。中神村に住んでいた中野家もその一例です。

- 中野家一発祥地は、甲州中野村(現在大月市に編入)で、先祖は武田氏の家臣であったが、天正10年(1582)「天目山の一戦」で敗れて武田氏滅亡後、縁故をたどって中神村の地にとどまり、武田家再興の機会を窺っていたようである。中野家は歴代八王子に店舗を持ち、織物(縞(しま))の仲買商を営み、ほかに周辺の商人、農民、旗本等に金の貸付も行っていた。
- 「中野久次郎」一中野家の家督は、四代に久次郎と改称して、以来概ね久次郎を襲名し、年を追って隆盛となり、八代久次郎の代には巨万の富をなして、八王子随一の仲買商となり、文化2年(1805)中神村の「観音堂」(恵日庵)を再建奉納した。九代久次郎の代には八王子に店舗二軒を構え業務益々栄え、嘉永5年(1852)中神村の鎮守「熊野神社」を再建した。
- 通称「中久大尽」というのは、十二代久次郎(天保10年(1839)～大正元年(1912)享年74歳)をいうのである。文久2年(1862)23歳で家督を相続、当時は天保の飢饉期で、中神村の半数近い47人の農民が中野家に土地を譲渡したりして、多摩有数の大地主として成長し、所有土地26町6反余、総石高153石余、中神村の耕地の3分の1を中野家が占めた。仲買先は、越後屋(現在の三越)・大丸・播伝等の江戸屈指の大商店と取引をしていた。また、紀州徳川家の御用達(ごようたし)をつとめ、土分待遇を受け帯刀を許された。屋敷内には倉庫10棟が軒を連ね、織物をはじめ、金銀財宝や米麦穀類等を貯蔵し豪商といわれた。だが時たまたま幕末に際していたので、幕府の火事奉行から、半ば強制的に莫大な御用金を命ぜられ、それが回収不能となった痛手やら、慶応2年(1866)6月16日には、勃発した「ぶっこわし」騒動の際、一揆の襲撃をうけ、おびたしい被害を蒙ったのである。(※⑧「ぶっこわし」一宮沢・田村酒造場襲撃一築地河原の戦闘に記載)さらに明治5年(1872)1月17日には、義賊(ぎぞく)と称する黒須強盗団に襲われ、金253両余、織物89品・衣類14点の被害を受けた等が原因で家運が傾き、明治7年(1874)に破産し家業を整理したのであった。

現在屋敷跡は、黒塀の門だけが残っています。(中神町1-13-17)

記

防犯宮沢支部去計 西山 禎一



村名	人数	施行量
中神村	30	米、粟3石4斗
宮沢村	17	1石6斗5升
築地村	6	8石5升
大神村	14	1石6斗
上川原村	7	1石5升
福島村	17	2石3斗
黒須村	15	1石8斗
田中村	6	7斗5升
押島村	不明	1両

天保8(1837)年中神村中野家施行
中野家文書「天保8年2月米、粟貸付家数
加え帳」より作成。

